ツルギミツバツツジについて（山崎　敬）

Takasi Yamazaki: On *Rhododendron lagopus* Nakai var. *tsurugisanense* Yamaz.

四国の冷温帯から亜高山帯に分布するツルギミツバツツジは中国地方から東北地方の日本海側の冷温帯に分布するダイセンミツバツツジ，ユキグニミツバツツジに類縁をもつので，それらと同一種類として扱ってきた．ツルギミツバツツジは全体に壮大で，葉が厚く，枝は太く，若枝や葉，果実にやや長めの剛毛があるなどで，ダイセンミツバツツジとは異なる．ツルギミツバツツジはダイセンミツバツツジと同様に葉柄に毛がある．ところがツルギミツバツツジの中にも葉柄が無毛のものがある．剣山では１株しか見付かっていないが，東赤石山，西赤石山ではこの無毛品が多い．葉柄に毛の無い点ではユキグニミツバツツジに類するので，一応それに当てておいた（本誌**59**：207, 1984）．しかし全体の形質はユキグニミツバツツジよりツルギミツバツツジと同じで，ただ葉柄に毛が無いだけの違いである．最近，愛媛県にこれがかなり広く分布することが明らかになってきた．四国北部の石槌山脈にはかなりこの無毛品が広がっているようで，ユキグニミツバツツジであるよりも，ツルギミツバツツジの無毛品として扱うのが正しいと考えられる．またほぼ石槌山脈に限られた一定の分布範囲を持つようなので，変種として扱い，アカイシミツバツツジと名付ける．葉柄の毛の有無の点でダイセンミツバツツジとユキグニミツバツツジに見られるのと同じ傾向が，ツルギミツバツツジとアカイシミツバツツジとの間にも存在することになる．

ツルギミツバツツジは全体が壮大で葉が厚く，主に日本海側に分布するダイセンミツバツツジ，ユキグニミツバツツジが枝はしなやかで葉が薄いのと異なる．ツルギミツバツツジ，アカイシミツバツツジの若枝や葉の毛は長さ150－200 μm と長い．ダイセンミツバツツジでは90－120 μm である．分布も四国に孤立しているので，ツルギミツバツツジは独立の種類とし，アカイシミツバツツジをその変種とするのが妥当な扱いと思う．

ツルギミツバツツジは徳島県，高知県に分布し，愛媛県でもアカイシミツバツツジに混じってかなり見られる．アカイシミツバツツジは石槌山脈ではツルギミツバツツジに混じって見られ，石川早雄氏の調査によると両者はほぼ同数ぐらいの割りで見られるという．徳島県では今のところ剣山で１株しか見付かっていない（Fig. 1）.

両者の多数の資料を送って下さった新居浜市の石川早雄氏，徳島県内を案内して下さった阿部近一氏，また高知県のツルギミツバツツジの資料を送って下さった山中二男氏に深謝します．

Rhododendron tsurugisanense (Yamaz.) Yamazaki, stat. nov.

Rhododendron nudides Nakai subsp. *niphophilum* Yamazaki var. *tsurugisanense* Yamazaki in J. Jpn. Bot. **59**: 210 (1984).

Rhododendron lagopus Nakai var. *tsurugisanense* (Yamaz.) Yamazaki in J. Jpn. Bot. **63**: 410 (1988).

ツルギミツバツツジ

Distr. Shikoku (Prefs. Tokushima, Kochi and Ehime).

var. **nudipetiolatum** Yamazaki, var. nov.

Ramuli juveniles petiolique glabri.

Hab. Shikoku: Pref. Ehime, Mt. Higashi-akaishiyama (C. Abe, June 12, 1983, Typus, TI: T. Yamanaka, May 29, 1957, TI); Mt. Nishi-akaishiyama, Dōzanmine 1500m (H. Ishikawa,

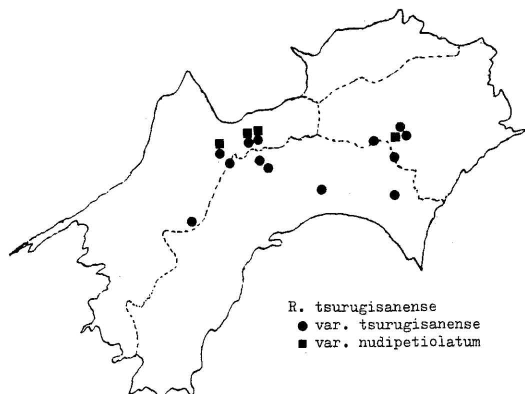


Fig. 1. Distribution of *Rhododendron tsurugisanense* (Yamaz.) Yamazaki.

Jul. 20, 1989, no. 6−10, Tl) ; Mt. Ishizuchiyama 1900m (H. Ishikawa, Sept. 4, 1990, no. 18−20, Tl).

アカイシミツバツツジ

（東京大学理学部附属植物園）

四国のカンサイガタコモウセンゴケ（中村俊之[a]，久米 修[b]，角野康郎[c]）

Toshiyuki Nakamura, Osamu Kume and Yasuro Kadono : *Drosera spathulata* Labill. subsp. *tokaiensis* Komiya in Shikoku, Japan

カンサイガタコモウセンゴケ *Drosera spathulata* Labill. subsp. *tokaiensis* Komiya は，狭義のコモウセンゴケ subsp. *spathulata*が葉身と葉柄の区別が明瞭でないヘラ形の葉をもつのに対し，葉柄が明らかであることなどで識別できる．コモウセンゴケの染色体数が2n＝40（4倍体）であるのに対し，カンサイガタコモウセンゴケは2n＝60(6倍体)であり（Kondo 1969, 1973)，またその分布も東海地方から近畿地方にかけた一帯に集中しているため，Komiya & Shibata (1978)はこれを新亜種として記載した．外部形態や染色体のさらに詳細な研究（中村，植田，投稿中）からも，カンサイガタコモウセンゴケを独立した分類群として扱うことは妥当と考える．最近，植田(1989) は東海地方の湿地に分布する植物群を検討し，カンサイガタコモウセンゴケを東海丘陵要素の一員とみなしている． ところがこのほど，四国にもカンサイガタコモウセンゴケが産することが判明した．①香川県三豊郡財田町の1箇所，②同綾歌郡綾歌町の2箇所，合計3箇所から採集されたもので，外部形態ばかりでなく染色体数が2n＝60であることも確認のうえ，カンサイガタコモウセンゴケと同定した．①の産地は山沿いの小さなため池の土堤の下部で湧水があり，周辺にはモウセンゴケやイシモチソウも生育していた．②の産地のうちの1箇所は山腹に開けた湧水湿地で，ヌマガヤ，コバノトンボソウ，カキラン，トキソウ，モウセンゴケなどが見られる場所である．もう1箇所は，上記の湿地に近い山道沿いに生育していたものである．

この新産地の発見によって，東海丘陵要素植物群の成立過程を考える上でさらに興味深い事例が見つかったことになるが，今回の新産地も既知産地同様に段丘堆積物上の湧水湿地であることは注目に値しよう．

なお，証拠標本（久米1240, 1248, 1249）は神戸大学教養部生物学教室に保管してある．

末筆ながら今回の調査に御協力いただいた香川植物の会会員の皆様，並びに本稿をまとめるにあたって御意見をいただいた大阪府立大学植田邦彦博士に御礼を申し上げる．

引用文献

Komiya S. and Shibata C. 1978. Distribution of Droseraceae in Japan. Bull. Nippon Dental Univ., Gen. Educ. (7) : 169−205.

Kondo, K. 1969. Chromosome numbers of carnivorous plants. Bull. Torrey Bot. Club **96** : 322−328.

——— 1973. Chromosome numbers of some *Drosera* taxa. Journ. Jap. Bot. **48** : 193−198.

植田邦彦 1989. 東海丘陵要素の植物地理Ⅰ. 定義. 植物分類地理 **40** : 190−202.

（[a] 神戸大学理学部生物学教室，[b] 香川県東部林業事務所，[c] 神戸大学教養部生物学教室）